

申請者 黄均鈞

論文題目 大学のアカデミック場面の言語活動への参加に関する考察  
—授業内のコメント活動の新参者に着目して—

論文審査委員 西谷 まり  
石黒 圭  
細川 英雄

### 1. 本論文の内容と構成

本論文の目的は、日本の大学のアカデミック場面で行われるコメント活動において、当該活動の新しい参加者がどのようにコメント活動に参加しているかという参加の実態とその変容の過程を明らかにし、その言語活動への参加の意味を捉えなおすことである。本論文では、その方法として、エンゲストロームの活動システムモデルの6つの要素を援用し、【ツール】、【ルール】、【コミュニティ】という3つの要素に焦点を当てて分析している。

近年の日本語教育においては、活動型授業、協働学習等の理念の浸透によって、教室が1つのコミュニティとして組織され、参加者が教室内の実践に共に協力して関わる場面が増えつつあるが、参加者が多様な言語活動にどのように参加しているかという参加の実態、及び、活動への参加の姿勢がどのような過程を経て深まっていくかという参加の質の変容については、明らかにされていなかった。これに対し、本論文では、コメント活動への参加の過程で埋め込まれた「実践知」を含めたことばの学びの実態を明らかにすると共に、コメント行為に対する参加者の認識の更新過程を言語という【ツール】の面から明らかにしている。更に、活動参加に関わる参加者の【ルール】の習得と刷新、当該【コミュニティ】における参加者のアイデンティティの変容の側面を明らかにし得ている点が、従来の研究を越える新しい知見である。

論文の構成は以下の通りである。

### 第1章 序論

- 1 研究目的と問題意識
- 2 本論の構成

### 第2章 日本語教育における「コミュニティへの参加」という視点の発生

- 1 構造主義のアプローチ
- 2 コミュニケーション中心のアプローチ
- 3 社会文化的アプローチ
- 4 本章のまとめ

### 第3章 実習生はコメント活動における「よい」コメントがどのように述べられるようになったか

- 1 日本語教師養成課程でのコメント活動
- 2 調査と分析方法
- 3 RQ1 の分析結果
- 4 RQ2 の分析結果
- 5 考察
- 6 本章のまとめ

### 第4章 コメントを表現する／受け取る際の参加者の意識変容に関する考察

- 1 分析方法
- 2 分析結果
- 3 考察
- 4 本章のまとめ
- 5 【ツール】の学びとは—第3、4章からみて

### 第5章 コメント活動への参加における「ルール」の学びに関する考察

- 1 調査概要
- 2 ゼミの概要
- 3 分析
- 4 考察
- 5 本章のまとめ

### 第6章 新参者のコミュニティ及びコミュニティの構成員との関係性の捉え方に関する考察

- 1 調査概要
- 2 分析結果
- 3 考察
- 4 本章のまとめ

### 第7章 結論及び今後の課題

- 1 【ツール】、【ルール】、【コミュニティ】から見たコメント活動への参加の実態
- 2 言語活動への参加の支援という視点
- 3 今後の課題

あとがき

参考文献

資料編

## 2. 本論文の概要

第1章では、日本の大学のアカデミック場面で行われるコメント活動において、当該活動の新しい参加者（以下、新参者）がどのようにコメント活動に参加しているかという参加の実態の過程と変容を明らかにすることが述べられている。

第2章では、言語活動への参加に関連する先行研究について紹介している。構造主義のアプローチ、コミュニケーション中心のアプローチ、そして近年台頭しつつある社会文化的なアプローチという3つのアプローチの歴史的な変遷を概観したうえで、日本語教育における「コミュニティへの参加」という視点の位置づけ及び、それによってもたらされた意義を検討している。本論文はエンゲストロームの活動システムモデルの6つの要素を援用し(図1)、言語活動への参加を新たに捉え直すことを試みている。その中で、【ツール】、【ルール】、【コミュニティ】という3つの要素に光を当て、以下の3つの課題を設けている。

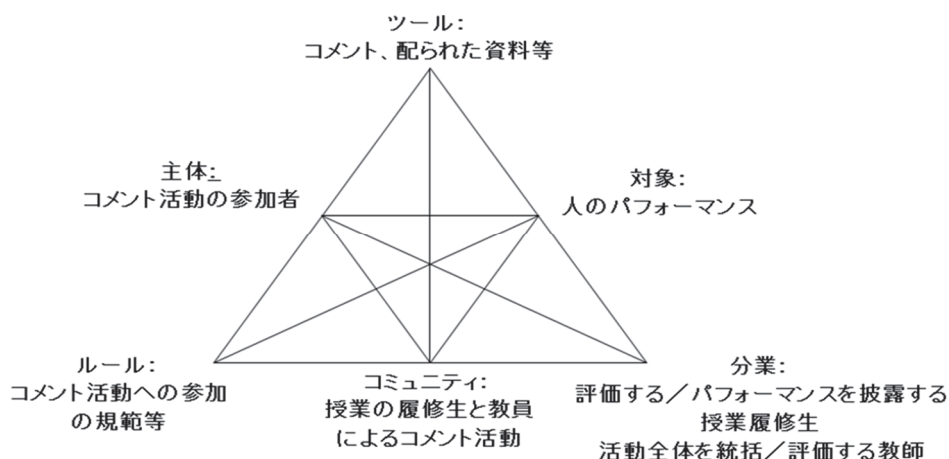


図1：エンゲストロームの活動システムで捉え直すコメント活動

課題1：新参者のコメント活動への参加の【ツール】は、活動が展開されていく中で、何によってどのように身につけてき、徐々に精緻化してきたのか。

課題2：新参者のコメント活動への参加において、どのような【ルール】を読み取ったか、活動が展開されていく中で、読み取った【ルール】は何によってどのように変わってきたか。

課題3：新参者のコメント活動への参加において、「コミュニティ」及び「コミュニティ内の構成員との関係性」をどのように捉えているか、活動が展開されていく中で、その捉え方は何によってどのように変わってきたか。

まず、第3、4章では大学の日本語教育実習の授業内で行われるコメント活動を調査フィールドとし、課題1の【ツール】としての「コメント」に焦点を当てている。対象者は中国人学生4名及び日本人学生10名の計14名である。第3章では、日本語教育実習のコメント活動における「よいコメント」をその場の新参者がどのように身につけてきたかについて分析している。第4章では、参加者は「コメント」を述べる及び受け取る際の意識に焦点を当て、主体の【ツール】使用の意識の側面の変化を扱っている。その結果、「伝え合い」と「積み重ね」という性質を持った活動の場によってコメント述べて必要とされる知識が絶えず深化されてきたこと、「コメントの意義への認め」と「他者との関係性の変化」による参加者の「積極的な聞く姿勢」及び「他者を意識するコメント述べ」という態度面の変化、両者が相乗効果を果たし、正のサイクルとなり、【ツール】の学びに寄与することを明らかにし

ている。また、新参者の【ツール】の学びの背後には、単に実践知の積み重ねと参加者の参加態度の変化だけでなく、主体の【ツール】に対する認識の変容も伴っていることを明らかにしている。

次の第5、6章は文系大学院のゼミの質疑応答場面というコメント活動を取り上げている。1人の新参者である、中国人留学生（留学生A）をとりあげた縦断的な調査である。分析手法は個人の内面に焦点をあてるPAC分析という手法を用いている。分析の結果、それまで自分が持っていた【ルール】に気づき、検証し、新たな参加としての【ルール】を作り出すことが、【ルール】の変容に当たっては大事であることが示唆されている。また、【ルール】への検証と刷新は、新参者のコメント活動への参加度合いの深まりの1側面でもあることが明らかになった。留学生Aは、コメント活動が行われる「コミュニティ」（ゼミ）に対して、帰属感があり、学びが得られる場であると考えているが、一方、緊張感を抱えていることが示されている。こうしたコミュニティへの捉え方は、留学生Aの緊張感のある活動参加をもたらす一方、励まされ、リラックスした参加姿勢も同時に生み出していた。「コミュニティの構成員との関係性」に関しては、最初の「新参者」対「古参者」から、「友人同士」を経て、「共に学ぶ仲間」へ、というように、自分と他のゼミ生との関係性への捉え方がコミュニティへの参加を通して変化することを明らかにした。また、関係性の変化の背後にはある、「ゼミというアカデミック世界の門外漢の新人である私」から、「他のゼミ生と親しい友達である私」、そして「他のゼミ生と共にゼミの研究活動に取り組む研究者である私」という留学生Aのアイデンティティの変容も含まれている。新参者のコメント活動への参加度合いの深まりは、新参者のゼミというアカデミック共同体の外部者から内部者への移行、アカデミック共同体の一員である一人前の研究者になりつつあるというアイデンティティの変化を伴っているものであることを明らかにしている。

第7章では、新参者のコメント活動への参加度合いの深まりを、【ツール】、【ルール】、【コミュニティ】の視点から分析した結論を受け、「参加者の言語活動への参加の支援」を目的とする言語教育を提言している。その中で、言語活動に参加していくためのことばの力とは何か、言語活動の場におけるルール及びそのルールの学びとは何かを再考する必要があると指摘し、また、言語活動への参加を支援するに当たって、参加者に「なりたい自分」を意識化させることの重要性を述べている。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の3点にまとめられる。

第一に、アカデミック場面において、新しい参加者がどのようにコメント活動に参加しているかという参加の実態の過程と変容を明らかにしたことである。活動型授業、協働学習の実践において、教室が1つのコミュニティとして組織され、参加者が教室内の実践に共に協力して関わる場面が増えつつあるが、参加者が多様な言語活動にどのように参加しているか、活動への参加の姿勢がどのような過程を経て深まっていくかについては、明らかになっていなかった。本論文は、活動参加としての【ツール】の質の向上と【ツール】に対する認識の深化、参加者の【ルール】の習得と刷新、当該【コミュニティ】における参加者のアイデンティティの変容等の側面を明らかにした点が、従来の研究を越える新しい知見である。

第二に、信頼性の高い質的研究手法を用いて、参加の実態の過程を生き生きと描きだしていることである。第3章及び第4章では、日本語母語話者と非母語話者が共に参加する活動において、新参者

の【ツール】としてのコメントの学びを、丁寧な縦断的研究によって明らかにしている。さらに、第5章及び第6章では、中国人留学生の内面に深く入り込む PAC 分析という手法を用いて、主体の持っている活動参加としての【ルール】の検証と刷新、そして新参者の当該【コミュニティ】のアイデンティティへの変容を生き生きと描写している。

第三に、日本語教育の現場では、語彙、文法、文型といった言語知識の運用力に焦点が当たることが多いが、本論文では、日本語教育における「コミュニティへの参加」という視点を中心に据えて議論していることである。そのうえで、個人の言語活動の充実への支援は、単なる狭義の言語面のサポートだけでなく、個人が言語活動というコミュニティの中で、いかにして満足感を得て、そのコミュニティでのなりたい自分を確立させつつ、能動的、主体的に参加者本人と活動参加者としての他者、そして自分と対話を行っていくかということへの支援の必要性を説いている。

その一方、本論文にはまだいくつかの問題点が残されている。

まず、アカデミック活動を組織する教師についての視点が抜け落ちている点である。第二言語習得分野における構造主義のアプローチ、コミュニケーション中心のアプローチ、社会文化的なアプローチの歴史的な変遷の意味が十分に咀嚼されていないため、コミュニティ参加論の展開がスムーズでないことに起因すると思われる。

次に、【ツール】と【ルール】については、データ分析によりかなり詳細に描き出せているが、【コミュニティ】をどう考えるかについては、やや脆弱な印象がある。また、著者は本論文の中で、エンゲストロームの活動システムモデルの6つの要素のうち、「分業」についての分析・考察ができなかったことを課題として述べているが、これも、「コミュニティ」論についての議論が深まっていないことに起因すると思われる。

さらに、本論文では新参者の活動参加が理想的に進んでいる事例のみが取り上げられている点である。新参者の言語活動参加へのプロセスそのものが重要であるため、途中で挫折した事例も同時に描くことにより、【ツール】、【ルール】の獲得を促進または阻害する要因、【コミュニティ】における意識の変容等について、さらに深い分析と提言を行うことが可能になると思われる。

しかし、以上の弱点は、著者も十分に理解しており、本論文の達成した成果を損なうものではない。研究をさらに深化、発展させることを期待したい。

#### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

論文審査委員 西谷 まり  
石黒 圭  
細川 英雄

2015年12月18日、学位請求論文提出者、黄均鈞氏の論文「大学のアカデミック場面の言語活動への参加に関する考察—授業内のコメント活動の新参者に着目して—」に関して、疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、黄均鈞氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、黄均鈞氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有していると認定し、最終試験において合格と判定する。